

# 歴史

---

クロード・シモン  
岩崎 力訳

新しい世界の文学

白水社

新しい世界の文学  
歴史

定価 六八〇円

一九六八年六月一〇日印刷  
一九六八年六月二〇日発行

訳者略歴

一九三一年生

一九五七年東京大学大学院修士課程修了

二十世紀文学・比較文学専攻

東京外国語大学助教授

主要訳書

フィリップ・ソレルス「公園」「ドラマ」  
ジャン・ギアール「南太平洋美術」

訳者 ◎ 岩<sup>いゝ</sup>崎<sup>さき</sup> 力<sup>つとむ</sup>

発行者 草野 貞之

印刷者 田中 昭三

発行所 株式会社 白水社

東京都千代田区神田小川町三の二四

電話東京(29)七八一一(代)

振替東京三三三二二八

郵便番号一〇一

歷  
史

Claude SIMON

*Histoire*

© Editions de Minuit 1967

Copyright in Japan by Librairie Hakusuisha

# 歴 史

クロード・シモン  
岩崎 力訳

---

白水社

新しい世界の文学



それはぼくたちを埋めつくす ぼくたちはそれを整理する

それはぼらばらになってくずれおちる  
ぼくたちはそれを整理しなおす するとぼくたち自身が

ぼらばらになってくずれおちる

リルケ『ドゥイノの悲歌』第八





そのひとつはほとんど家に触れんばかりで夏など開け放した窓のまえに腰かけて夜おそく勉強しているとぼくにはそれがみえるのだった。すくなくともスタンドに照らしだされたいちばん先の小枝と暗闇を背景にしてかすかにうちふるえる羽毛にも似たその葉はみえた、電気の光で非現実的なほどなまなましい緑に染められた楕円形の小さな葉はときおり白鷺しらさぎのような動きをみせるのだがまるで突然生氣をあたえられて独自に動き出したかのようにだった（そのかげには次から次と伝えつがれる目にみえないざわめき神秘に満ちた微妙なざわめきが枝々の暗い茂みのなかにひろがっていくのが感じられた）まるで木全体が目をさましぶるぶるっと身をふるわせゆらゆらと体をゆするかのようだったがやがてすべては静まりかえりそれらもまたもののように動かなくなるのだった。電灯の光線にじかに当たっている手前の葉はもっと遠い小枝よりまえにつき出されてくつきりと浮かびあ

がっており、小枝のほうは光がだんだん弱くなるにつれて見分けにくくなりかすかに見えるだけになりついでただあるらしく思えるだけになりついでには完全にみえなくなるのだった。とはいえ暗闇の厚みのなかでそれらがたがいに交差し次から次と続きあるいは上下に積みかさなって無数にあることは感じとれた。そしてその暗闇の厚みからはかすかに擦れあう音眠りこんだ鳥たちのかほせい鳴き声眠りのなかでもこまかく身をふるわせせわしなく体を動かしながらうめいている鳥たちの声が聞こえてくるのだった。

まるで彼女たちがまだそこに、だだっ広い荒れはてた家のどこかにいるかのようだ。今ではななかげ空になってしまった部屋部屋には訪ねてきた老婦人たちのふりまく化粧水の匂いではなく地下室のというよりは地下墳墓のあの猛烈なかび臭いにおいがたちこめていた。まるで死んだ獣けものの死骸たとえば床板の下にあるいは柱の根もとにはさみこまれた鼠ねずみがいつまでも囮りつづけていて粉々になつた漆喰しっくいや悲しみやミイラになった肉などのあのつんと鼻をつくいやな臭いを放っているかのようになつて、まるであの目にみえない戦慄せんりつあの目にみえない溜め息

暗闇をみたすあの目にみえない瘰癧が鳥たちの翼や喉のたてる音であるばかりでなく時間と死に猿ぐつわをはめられはしたものの決して負けることがなく負けてもおらずいつもそこにおいてささやき続けるひよわな幽霊たちがあきらめることなく執拗に続ける哀れっぽい激しい抗議でもあるかのように、その幽霊たちが夜の闇のなかで目をかっと見開き今では彼らに許された唯一の居場所つまりどなり声とかかすかな笑い声とかあるいは憤慨したり恐怖に襲われたりするときの叫びとかがときおりうち破るあの沈黙の下で祖母のまわりでべちゃくちゃしゃべっているかのように

彼女たちが陰鬱な悲痛な顔をして網の目のようなこの枝にとまっているさまが想像される。ちょうど歴史の教科書にのっているあのオルラン派のカリカチュアのように、それは王家の系統図なのだが成員は人間の頭をした鳥の形でしかもダイヤモンドをちりばめた冠をかぶり怪物のようなブルボン家特有の鼻（というよりはむしろ嘴）もちゃんとついていて枝のあいだを飛びかっているのだった——彼女たちはといえ、うつろな、まるい目をして、ヴェールのかげのその目はいつでも涙にうるんでおり、とはいっても、化粧のせいではなく年のせいで青味がかかったというよりはむしろ黒ずんだ醜い爬虫類

類のあのじつと動かない瞳のうえをすべる皺だらけの膜に似ているその臉をせわしなくばちばちまばたきするあいだだけ見えるのだったが、暗く濡れて光る鳥の羽根でできた彼女たちの緑なし帽には先が鋭くがっていかにも切れそうな長い留め針が差しこまれており、それがまるで紋章にみられる鷲の嘴か爪のようなのだった、それに、その名前（*Black Jade*）が音の關係で鳥の名前を思い出させる（*Black Jade*）あの真黒な輝きをみせる真黒な寶石や、リボンや、皺だらけの首をかくしているあの犬の首輪のような首飾りや、あの堅苦しい貴族の称号——それは子供だったぼくの心には、黄ばんで老いさらばえた肉や衰れっぽい声と不可分のものに思っていたが、そういえば城砦や、花や、古い城壁などに似た彼女たちの名前も同じことで、野蛮なもの、とるに足らぬものに感じられ、まるでふざけた気味の悪い神が遠い昔のヴィジゴート族の征服者たち、重い剣をひっさげ鉄の鎧に身を固めた征服者たちを、よぼよぼで侮辱されてもいかんともなしがたく、ジョルジュット縮緬に身を包みかろうじて黒檀のステッキで身をささえるといったそんな幽霊のような形で生きながらえる運命におとしられたかのようにだった

静まりかえったなかで年老いた女中がびっこをひき

がら歩く足音がきこえるからっぽの家のなかを横切り客間の扉をノックして開きメドゥーサのように髪をふり乱した顔をつき出しやはり侮辱されたかのような荒っぽい怒り狂った声でざらざらした中世的な響きをもつ名前——アマリック、ヴィルム、グワルビア——に將軍夫人だの侯爵夫人だのといった称号をつけて呼び、やがて姿を消しそうといった名前を包む雰囲気の中にゲルマンの豪族だの戦槍だのイタリアの都市だのくちなしだのイメージがきらきらとさまざまに変わる光を放っているきらびやかな思い出を入りこませるのだったが煎じ薬だの魔法だの血行不全だのに心をさいなまれて温泉場の公園をぶらつき毛皮に身をつつんだりぼろをまとったりしているがとにかくものの形をなさないあの包みのようなものもひとつふたつ

そして彼女たちは、金色の額縁にいれられた絵のしたの仰々しい肘掛け椅子に、体を硬直させて腰かけるのだったが、その様子は悲壯でもあれば哀れでもあり、ぼくたち子供の目からみると、ものすごいほどのもろさあるいは滑稽さにもかかわらず（あるいはひょっとしたらそのために）なんとなくこわいのだった。あのド・レシヤック叔母、あのスリーズ男爵夫人がそうだったが彼女は男のような若さを保っていて——それはひょっとし

たらただ単に彼女の莫大な財産の効果だったのかもしれないが——その立ち居振舞いの自由さときたら祖母やその友だち四分の三は破産してしまつた友だちのそれとあざやかな対照を見せていた。彼女は昔馬術競技ではなばなしの成績をあげたことがあつたけれども、ぼくにとつて彼女の名前は実にさまざまな理想をよび起こすもので、滑稽なほどごてごてと化粧しては皺だらけの顔を無器用にいろどり年老いてひびわれた唇に塗りたくられた赤は滑稽にもさくらんぼという単語のみずみずしさを思い起こさせるのだった。その感じは祖母と母に連れられてぼくがはじめてポーで競馬を見たとき騎手たちのまどつていた田舎じみたあざやかな色（緑色のジャケツ、さくらんぼ色の袖や騎手帽）にも見いだされるものだったが、そもそも緑なし帽（togue）という単語それ自体ぼくの心に（化粧のこと、アマゾンの伝説、高音で気取つた感じの彼女の声音、あるいは彼女がさも得意げにかぶつていた羽毛の髪飾りなどとあわさつて）気がふれた（dépité）という形容詞を思い出させるのだった。ぼくにとつてしかしその言葉は逆説的に一種特殊な威光を彼女にそえるもののように思われた。いささか気違いじみたふるまいをするとかそういうふるまいができること自体財産家という彼女のおかれている状況にいわば

内包されるひとつの特権であるばかりではなく彼女の年齢にふくまれていゝるものでもある。なぜならシャルル叔父がときおりそういうのを聞いたことがあるけれどもまだ若い女について気がふれていると言ふことが軽蔑と哀れみをふくむとすればそれを老婦人という言葉に結びつけて使うときにはほくの心のなかで逆に一種の荘重さというか神秘というかそういうものがこの言葉につきまとうことになり彼女たち全部をとりまくあのわけのわからない一種の力強い雰囲気ふんいきのなかにそれをつつみこんでしまうからだ。どことなく幻想的でなんとなく信じがたい感じの彼女たちは王侯然とした孤独のなかにひきこもり堅苦しい荘重さのなかに閉じこもっていたがそれは彼女たちの肉体的なかわさといかにも対照的だったし、それに彼女たちだけがしっかり握っている特権、というのも彼女たちについて人はまもなく死ぬはずだと言っていたからだ、とにかくすべてがあらそって——あの無器用な化粧もふくめて——人間と動物と自然を越えたものの中間に位置する存在、まるで、近づきえないもの威光で飾りたてられた世界の鍵を握っている被造物たちの法廷に（判事あるいは地下の神々のように）列席しているかのよう、そういう存在のもつ神話的でこの世のものとも思えぬ感じを彼女たちにあたえているのだった

実をいえばミイラの集まりといった感じではなかった、なぜなら祖母もふくめてほとんど全部がどちらかといえはでつぷり太っていて、いささかおよぶよぶというのではないにしろ、さだかならずふわふわ漂う影のようであり（布地、肉）死を待っている、というよりも死んでしまったのかもしれない、（彼女たちの哀れっぽい声も、黒く、きらきらする鉱物質の装身具に埋もれてくずれてしまったような顔も、ちらちら光る羽根飾りのついた緑なし帽も、ちらちら光る首飾りも、指輪をいくつもつけた指も）、彼女たちの嘸みこむあの柔らかいお菓子に似た感じで、顔の表情にはいつみても同じ悲嘆とやむことのない嘆きとつねにかわらぬ無気力が刻印されており、蒼ざめた唇はといえはお菓子にふりかけられていた粉砂糖がすこしこびりついていて、ときおりそのうえをちよろつと舌が通るのだったが、ちらつと見えるだけの舌は灰色がかってざらざらしており、まるで、貪欲どん欲で無表情で正確な食虫動物が蠅はえや蟻あちをあつという間に捕えるときの舌のように、粘りつく感じだった

祖母のそばにひざまずいていたとき、彼女は祈禱きとう台に、前腕を赤い肘掛けにかけて、ぼくは絨毯じゅうたんのうえにいて、そんなときに見えた一種の捕捉器官しじゆうのようなもの、それに金糸で花模様しじゆうを刺繡した司祭のきらびやかな上祭

服、そこに灯明の光が映って、白熱したかみえる神秘的なその植物をやわらかく光らせているものだったが、ぼくのそばには前につきだされた老いた顔、色もあせて衰れをもよおさせずにはいない顔があり、目は閉じていたけれども、すこしばかり開いた口からはざらざらした味着のみえるふあつい舌が淫らな感じで押し込まれ、彼女があいかわらず顔をふせたままにしていたにもかかわらず、まるで餡を口にいれるときのように白い聖餅を受けとめるためにいっそう突き出され、すばやくそれを見えなくしてしまうのだったが、そのときの表情は苦惱にゆがみ、食いしんぼうな至福感にひきつっているものだった、彼がふりむいて腕をひろげたとき、ぼくは服の前身頃になにが書かれているか見ようとしたが、そこでまた彼は背をむけてしまつて、ぼくにはまたバラしか見えなくなるのだった。しかしあんなに匂うのはそのバラではなかった。ぼくは捜した、蠅とかいいう水のなかから生える草の花もあった、くるくる巻いてその先が朝顔型の広口になっている白い大きな円錐状の花、古びると縁が黄ばんでしまい、端のほうが縮んだり裂けたりして……

吹きよせられたように茂り、毛足の長いピロッドのような勃起性の黄色い舌に似たものを突きだして、そ

れにふれたりすると指にサフラン色の花粉がつくのだったが、匂いを放っているのはそれでもなかった。というのも胡椒のにおいだったからだ、客間の暖炉のうえのふたつの花瓶にもバラがいてあったが、それは二本の宝角で、それ自体装飾として花が描かれており波頭が金色に光っている瀬戸物の波のうえの瀬戸物の羽毛をもった白鳥の尾からそれがでているのだったが、その波頭のところには二本の蠟燭の炎がうつって踊っているのまでぼくには見えていた、というのも蠟燭それ自体は見えなかったからで、ただそうはいってもときおり彼が開かれている本から離れるときには右側の蠟燭が見え、そんなときにはまたバラの絵模様のおいだに金色の大文字が装飾的にかかっているページも同時に見えた、それから彼がもどりなかがばふりむいて腕をひろげる、といつても両肘は体にびつたり貼りつけたまま、ひろげられるのは両方の手と糊のよききいたレースの袖に包まれた前腕だけで、いつか見たサンドイッチマン、レストランかなにかの広告をつけた二枚の板にはさまれているあのサンドイッチマンたちを思い出させ、まるで彼の両腕は、ちょうど人形芝居の繰り人形のそのように短くこわばった感じで腹の高さあたりから生えているみたいだった、そのまんなかをバラが上にのびていてというよりはよじのぼるよ

うな感じのバラの木の二本の幹が交差し絡みあって茨の  
ような刺のある8の字を描いていたがそれはぼくがその  
なかに落ちこんで皮をすりむいたときのことを思い出さ  
せあわてふためいた彼女が家の友だちのひとり庭でバ  
ラを切ろうとして刺にささったというだけで破傷風のた  
めに三日で死んだという話をして……

刺繡した十字架のこれまた鋭く尖った暗い小さな葉が  
帯のまじわるところでからみあっているなかにとび散つ  
た血痕 その小さな葉むらは赤い心臓の周囲に一種の冠  
を形作りついでちようどあのなんといったかローズ・ポ  
ンポンとかティー・ローズとかいう蔓になって這う種類  
のバラをからませた四阿の支柱のように左右にのびて水  
平な枝に巻きつきときには赤い房がとびでているのだが  
それはおそらく凶案家の気取りというか気まぐれとい  
うかそんなもので波形模様のついたその上祭服の薄紫の地  
を目で追っていくと微妙に動く反映のならばが近づき  
に色調をかえジグザグ模様を描き細い線状の斑が布地の  
うえにくりのべられた波の不動の連続をえがきだしてい  
たがちようどそりたつ崖のうえから下を見おろした感  
じでその上祭服は金色の総で終わっているのだった。そ  
のしたに短い白い祭服がすこしはみでておりやがてスー  
タン(神父の着る長衣)そしてバラの花練模様をあしらった絨毯を

踏みつけている黒い大きな磨いた靴それが動いて爪先が  
突然ぼくのほうにむけられるのが見えたがそのときもや  
はり前身頃の真中の十字架になが書かれていますのか  
読みとる暇はなかった。それもやはり刺だらけでゴチッ  
クふうに鉤爪のついた文字で三つか四つ書かれていて  
おそらくはINRIかあるいはあのPとXとをからみあわ  
せたXPINTOI(スト)だったかもしれないそれともま

た線書きされた魚に象徴される神をあらわすギリシャ語  
だったかもう彼は背中をむけてしまっていて一瞬ぼくに  
は蠟燭の一本がその小さな炎をほとんど水平にかたむけ  
るのが見えた。まわれ右をしたときに彼が空気をかき乱  
して渦巻きを起こしたのにちがいないその炎はまたして  
も動かずに押しよせる紫色の波や血痕や木の葉のかけに  
かくれてしまうのだったが一瞬ぼくは枕のうえのママの  
顔それもレースの袖と寝台の緑のあいだ傾けられた腕と  
寄せ木細工でできている寝台の脚の正面と右手の台脚と  
で形作られる三角形のなかにおさまったママの顔を見る  
というよりは垣間見ることもできた。台脚のいちばん上  
は一種のシナ帽とでもいうかマホガニーの円錐のうえに  
のっている黒檀の小さなまるい球がのっているそんな形  
をしていたけれどその円錐は下のほうにむかってだん  
だん広くなりふたたび黒檀の輪につながっていてマホガ

ニーと黒檀くろたんとがずっと交互に使われており開かれた手の下の縁が黒い小さな球に軽くふれていたけれどもそのすぐ下の花綵はなさい模様のついた枕の白さからは正面からみたナイフの刃のような彼女の顔が浮き立って見えていてやはりナイフの刃のようだった彼女の鼻のうへの両側には黒く輝くふたつの目 やがてすべてがそれぞれの場所にもどり彼がふたたび本のほうに体を移すと彼女の顔もきえてしまつて色あせたりラの色をした波うつ縞模様しままようが左から右へと移動しやがてふたたびそれがちょうどぼくの目のまえでとまるのだった どういう伝説でんせつだったかと彼は言うものだった道のほとりの蒼白そうはくい花々に降りかかる主の血のしずくを目で追つていくとからみあつてのぼつていき四辻も冠も心臓も通りぬけさらにもつと上のほう彼の頭蓋骨のまんなかにあるあの聖餅せいひんあの髪の毛を刈り落とされた灰色の月にまでそれがつながついてあの人たちはいつたいなん日おきにいくのかなとぼくは考えたものだったやがてそれがもはやみえなくなりそれというのも彼がまるで首を切りおとされたみたいに急に頭をふせたからで今ではぼくのところからは見えないのにやら神秘的な仕事に熱中しているのだった(ひょっとしたら血にまみれたそれを両手でささえているところだったのかもしれないちようどあの司祭それを捧げもつて歩きま

わつたあの殉教者のように おお と彼女が言った 十メートルだろうが五十メートルだろうとにかく今のこんな状態になつてしまつたらあなただつてご存じのようになりたいへんなのは最初のひと足だけなんですよ)そしてちようど彼の左肩の上にあたるところに今では彼がみえるのだった彼というのはつまり彼女が作らせて頭をちよつとまわせばすぐそれがみえるように寝台と平行な右手の壁にかけさせたあのほかでかい引き伸し写真なのだだがセピア色の短い鬚ひげ濃い眉毛のしたで青かったのちがいないと思われる明るいセピア色の目まんなかの線できちんとわけられたセピア色の髪いささかからかい好きでよくよせずいかに胆いそつ玉のふとそうな表情肩のすこし下のあたりで切りとられぼやけた量かさにとりかこまれている胸像ぶつぞうまわりがだんだん色が薄くなつてしまいいには白くなつている明るいセピア色の背景だからまるで彼は中空に漂つて重さをもたず静かにほほえみをうかべているといった感じだつたちようど壁紙を飾っている小さな花籠はなごを並べた模様のまえで後光につつまれているあのあらわれのひとつのようですよやかな巻き毛の神さまとといったものに似ており大胆そうな皮肉屋で永遠の楽天家といった感じのほほえみを浮かべていて死んだ後までもその微笑を保ち続けているのだったがいかにダンディ

一な折り返し細いセピア色の優雅な上着も明るい栗毛色の優雅な顎鬚も陶器を思わせるそのまなざしも二十年まえの彼女の目にうつったとおりでおそらくは彼女もそういうふうに見るのをやめなかったにちがいない姿のままいつでもそこにありいつ終わるともしれぬ彼らの婚約時代の年月を通じて漂うような非物質的な靄がかつた後光につつまれて決して忘れることのできないイメージになつていた。その年月のあいだ彼女にとつて彼はすでにそういう形つまり手で触れてみるわけにはいかず空中に漂っているような形でしか存在していなかったのだ。あたかもそれ（つまり婚約時代）が一種の予兆となつて彼女がほんとうに彼を所有していた目もくらむような短い期間のうちに彼女を待っていたもの言いかえればそれ以前もそれ以後も彼女に持てるものはなにかといえればそれは彼がどこかに存在していつかは自分も彼のところに行けるのだという確信熱烈なそして同時に静朗な確信なのだということ告げ知らせていた。そのどこかというのはどこことなく東洋ふうな楽園のような彼方であり一種のエデンの園でありおおよそ想像もつかないような植物がみられ彼が彼女に送った絵はがきの切手を飾っているその棕櫚とおなじようにゆらゆらとゆれている棕櫚の葉がすれあつてたてるざわめきに満たされた庭のようなど

ころなのだった。そういつた絵はがきの裏の通信文を書きこむことになつてゐる部分には都市の名と日付の下にただ署名してあるだけでたとえば――

《コロンボ 七／八／〇八

アンリ》

そして表には（彼女が――そのころ若い娘だった彼女が――都市の名前と日付と署名とを読み絵はがきを裏返しにしたとき、彼女と祖母はあのスペインふうのココアを入れた小さな茶碗をまえにして向きあつて腰かけていたがそのココアでふたりは肝臓の調子を狂わせてしまったのだつたというのも彼女が召使いに言いつけるそのココアはひどく濃くて小さな銀の匙をそのなかに突きさすと傾きもしなければ茶碗のふちに倒れもせずまっすぐ突つ立つたままになつてゐるほどだつた――あるいはまた、夏（七月の日付になつてゐるコロンボからのはがきが彼女の手もとについたのは毎年のように彼女たちがもう田舎の家にでかけてしまつたあとだつたにちがいない）きらきら輝くような庭のなかで襟もとまできちんとボタンでとめるようになってゐる小さなカラーのついたたっぷりしてとつつきにくいガウンその襟は地面をひき



ずり花冠のように末広がりになっているそういうガウンを着てだから日本の版面をまねた髪型つまり脇で卵の殻の形に大きくカールさせ後ろに巻き毛をたらし髪形とちつとも日焼けしていなくて心もちぼつりした彼女の顔をみるとまるで蓄音機のラップを伏せてそのうえに白と黒でいろどられたいかにもこわれやすそうな陶器の頭をのせたような感じだった)……とにかく表には港、総督の官邸、客船の食堂、はっきりとは見わけられないが棕櫚が幹を水面に横たえて銀色にきらきら光っている湖丸木舟、そして説明として、コロンボ湖の月夜の漁

広大な大地の表面からはぎとつたうろこのような断片、あるいは明かりとりの四角い屋根窓といってもよいがそこに次から次とあらわれるのはじっとして動かない嵐、生い茂った植物、砂漠、飢えた群衆、駱駝、あるいは胸もあらわに水運びや長太鼓の奏者に扮している結婚適齢期になったかならぬかの若い土人の女、安物の金びか衣装に身をつつみものうげに無気力にポーズをとっている彼女たちの粗暴な目つきいじくりまわされた乳房、それがイギリスの商社のために働く中国人やカイロ人のカメラマンのレンズのまえにたたされて《水壘を運ぶセイロンの少女》、雑多でうようよして無尽蔵な世界

が入りこむというよりはずうずうしく不意に、堂々と、金欲しげに、乱暴に闖入してくるのだった。いまだかつて冒されたことのないこの城塞体面と礼儀正しさのこの城塞に 彼女はそれ……

(彼女は——堅苦しい、コルセットの張綱と堅苦しく衣ずれの音をたてるスカートとにかくされた彼女の体、目だたないクリームと目だたない白粉のヴェールにいろどられた彼女の晴れやかな顔を見ると——道に沿ってそそり立つあの高い壁、人が入りこむのを許す気配もなく、高慢で秘密をおしつつかんでいるあの壁、そのうえに見えているものといえは色濃く堅い感じの緑のあいだにとても手折るわけにはいかない花そよとも動かない花をつけた月桂樹か椿の枝の茂みの頂だけでそのかげからは噴水の音のような鳥の声が聞こえてくる(聞こえるような気がする) そういった壁に似ていた)

……囚われ人あるいは住人というのではなくて、いわば天主閣であり、城壁であり、濼であるような、言いかえればそれによってひきとめられそのなかに閉じこめられているというのではなくて、それらの石自体、城壁そのものであるように思われ、彼女を守るものといえはほかならぬ(銃眼からつき出た長い大砲もなければ護衛も射手もおらず、気ぐらいの高い父親もいなければなにか